小学生の住意識と住教育に対する意識

正岡　さち*・高嶋智恵**

Sachi MASAOKA and Chie TAKASHIMA

The Consciousness of Dwelling and Housing Education of Elementary School Students

ABSTRACT

(1) 小学生にとって、住まいとは、日常生活を営み、家族との関わりが大きい場所であり、住まいの外面的な機能性だけでなく、内面的な機能性や精神面から捉えていることが伺えた。

(2) 住まいに関する情報源は、テレビ、家庭科の授業、家族との会話等であった。住教育は家庭科教育と家庭における教育が大きく担っており、学校外ではほとんど行なわれていなかった。

(3) 家庭科における住居分野への関心は非常に低い。また、家庭科住居分野の学習内容への関心は、学関心が高い内容と低い内容に大きな差は認められず、題材そのものよりも取り扱い方による影響と考えられた。

(4) 家庭科の住居分野で学習してみたい内容は、子ども部屋、防災、防犯等で、小学校学習指導要領で示されているものはあまり上位には含まれておらず、小学生の関心と違いがあることが伺えた。しかし、指導する側としては、プライバシーに立ち入る内容は扱いにくいという矛盾が生じ、この点が住居分野の指導の難しい点であるとも考えられる。

(5) 学校外の住居関係の活動･イベントでしてみたい作業･活動では、製作活動に関する項目が多く、家庭科の住居分野でしてみたい作業･活動とほぼ一致していた。

(6) 全体的に、６年生よりは５年生の方が、男子よりは女子の方が住居分野に対して積極的な姿勢が伺えた。また、男女で興味･関心の方向性が異なっており、女子は室内を飾ることやインテリア計画、身近な物の製作活動への関心が非常に高かった。男子はより専門的ともいえる模型等の製作活動や住居の歴史等の、より学術的な内容への関心が高い傾向にあった。

(7) 住居分野は、家庭科の他分野や他教科と関連させることができやすい分野である。同じ家庭科内での他分野との連携を図ることはもとより、他教科との連携をも図ることで住教育の時間を十分に確保し、取り扱い方を工夫することによって、小学生の興味･関心を高めることが望まれる。

【キーワード：小学生，小学校，家庭科教育，住居分野，住意識，住教育】

Ⅰ．緒言

住居は生活の器と言われ、生活を営む上で必要不可欠な存在である。しかし、「うさぎ小屋」という表現にあるように、日本の住まいは貧しいと諸外国から指摘されて久しい。それは、長い歴史の中で培われてきた我々日本人の住意識の低さと、これを改めていくための住教育を受ける機会の少なさが関係すると考えられる。

小学校家庭科においても、住居の内容は戦後の学習指導要領から現在に至るまで記載されている。しかし、家庭科教育における住教育は充実しているとは到底言えず、多くの研究[1)-9)]で、教材が少なく指導に困ることが多い、住居に充てる授業時間が少ない、場合によってはほとんど行われていない、などの課題が挙げられている。特に、速水、関川らの研究[1)]では、中学校、高等学校の家庭科教員への調査で住居分野は他分野と比較して、教材や取扱い時間が少ない、大学での住居の授業が不足していると指摘している。現行の教育職員免許法では、住居領域で取得を義務付けられているのは、わずかに２単位である。２単位の知識で教壇に立つには知識不足であり、このあたりにも住居領域が教員に敬遠される根本的な原因があると考えられる、と示されている。そもそも、家庭科における住居分野の研究はあまりなされておらず、特に小学校における住居分野の研究は少ないのが現状である。また、小学生が住居分野でどのようなことに興味を持っているのか、といったことも明らかにはなっていない。

現行（調査当時）の小学校学習指導要領家庭科[10) 11)]の住居分野の内容は、「(6) 住まい方に関心をもって、身の回りを快適に整えることができるようにする。ア　整理・整とんや清掃を工夫すること。イ　身の回りを快適に整えるための手立てや工夫を調べ、気持ちよい住まい方を考えること」と示されている。しかし、学習指導要領には示されていないものの、総合的な学習の時間をは

*　島根大学教育学部人間生活環境教育講座
**　元島根大学教育学部生

じめ、教育の場でも取り上げられることが多くなったバリアフリーやユニバーサルデザインなどは住居とは密接な関係にあり、住居分野に興味を持たせ、効果的に教える工夫が必要であると考えられる。

以上のことから、本研究では、小学生の住意識と家庭科を中心とした住居に関する学習の現状を把握することによって、今後の住教育のあり方を考えていくことを目的として調査を行なった。

若干の知見が得られたので、ここに報告する。

Ⅱ．調査概要

調査方法は質問紙によるアンケート調査である。

調査内容は、小学校家庭科の住居分野を中心とした学習への関心や、家庭などの学校外での住居との関わり方の現状等である。

調査対象は、島根県内の小学校１校で、家庭科を学習している５，６年生、調査期間は平成18年12月中旬～下旬、回収数は５年生79人、６年生84人である。

Ⅲ．結果及び考察

１．調査対象者の属性

対象者の概要を表４に示す。５年生は79人（男子37人、女子42人）、６年生は84人（男子43人、女子41人）である。

対象校での住居分野は５年生の３学期以降に学習する予定であったため、５年生は住居分野は未学習ということになる。従って、学年別で比較する場合は、学習者と未学習者の比較でもあることを付け加えておく。

	男子	女子	合計
５年生	37	42	79
６年生	43	41	84
全体	80	83	163

＊人数

表１　対象者の概要

２．家庭における住まいへの関わり方の現状

⑴ 住居観

小学生にとって住まいとはどういうものか、という住居観について複数回答で答えてもらったところ、「生活する場所」が83.5％と最も多く、「家族とふれあう場所」「食べる・寝るなどの場所」と続いた。

これを男女別に見たものを図１に示す。男子では「生活する場所」が最も多く、「食べる・寝るなどの場所」「家族とふれあう場所」と続く。女子では「生活する場所」が最も多く、「家族とふれあう場所」「食べる・寝るなどの場所」と続く。男子に割合が高かったのは「雨や風、危険などから身を守る場所」「趣味を楽しむ場所」であり、女子で割合が高かったのは、「家族とふれあう場所」「くつろぐ場所」であった。女子の方がより心理的側面からも住居を捉えていることが推察される。

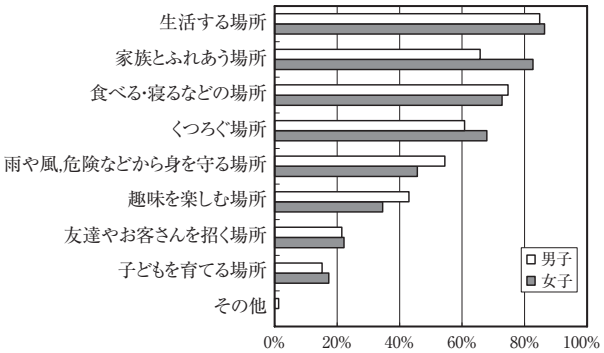

図１　住居観（男女別）

また、学年別では、５年生でハード的イメージで捉える傾向があった。

⑵ 住まいに関する情報の収集源

住まいについて知ったり、学んだり、考えたりするきっかけについて尋ねたところ、「テレビ」が59.1％と最も多く、「家庭科の授業」「家族との会話」と続く。家庭科以外の授業は非常に少なく、学校における住教育は家庭科教育が大きく担っていることが推察される。

これを男女別に見たものを図２に示す。男女で大きな差が見られ、全体的に女子の方が多くの情報源から情報を得ている傾向にあった。女子より男子で多かったのが、「テレビ」「新聞・広告」「家庭科以外の授業」であり、男子より女子に多かったのは「家庭科の授業」「家族との会話」「本・雑誌」であった。授業については男女共に同じ授業を受けているはずであるが、男女で捉え方が異なることが伺えた。

これを学年別に見ると、図２に示すように、６年生よりも５年生に多いのは「家庭科の授業」「家族との会話」で、６年生の方が多いのは「本・雑誌」であった。

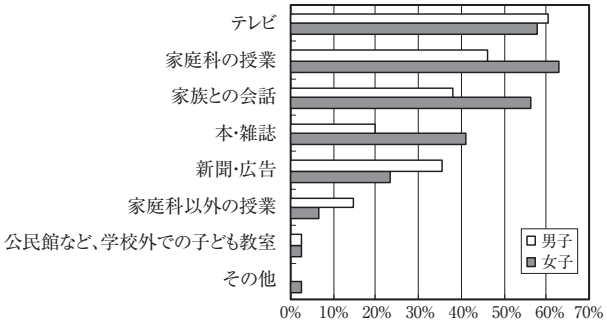

図２　住まいに関する情報源（男女別）

⑶ 家族と話す住まいに関する話題

住まいに関して家族と話す内容について尋ねた結果、「整理整とんや片付け・掃除について」が最も多く、「戸締りや防犯について」「住みたい家について」「住まいの環境の調節について」と続く。整理整とんや片づけ・掃除、戸締りや防犯、小学生にとって身近な内容が話題になりやすいことが伺える。

男女別に見た結果を図３に示す。ほとんどの項目で、

女子の割合の方が高くなっており、特に、「庭やベランダについて」「カーテンや家具などについて」「家や部屋の飾り付けについて」「住みたい家について」で差が大きかった。女子の方が住まいの装飾に関連した項目について家庭で話をしている機会が多いことが伺える。逆に差が認められなかったのは、「戸締りや防犯について」「住まいの環境の調節について」等、性別に関係なく、生活上必要な項目があがっていた。

また、学年別では若干の差はあるものの、特に大きな傾向は認められなかった。

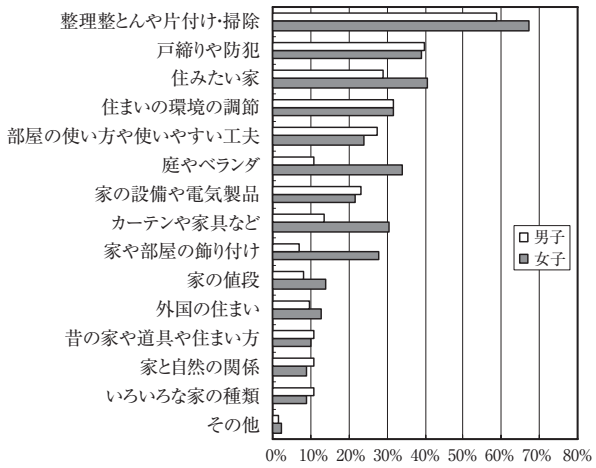

図３　家族と話す住まいに関する話題（男女別）

⑷ 住まい関連で家庭で実践していること

住まいに関することで小学生が家庭で実践していることについて尋ねたところ、「使わない部屋などの電気は消す」が最も多く、「窓の鍵閉めや戸締りなどをする」「冷房・暖房の調節をする」と続いた。

住まいに関する話題では整理整とんや片付け・掃除が約６割と最も多かったが、「身の回りを片付け、汚れをためない」という行動は約４割にとどまっている。実践されていないからこそ、家庭での会話にあがるのではないかと推察される。２番目に多かった戸締りや防犯については、「窓の鍵閉めや戸締り」を約７割以上が実践しており、どちらの質問でも上位に位置する項目である。また、住まいの環境の調節は話題としては３割程度しかあげていなかったが、「使わない部屋などの電気は消す」「冷房・暖房の調節をする」「日光の暖かさ明るさ、風を取り入れる」「大きな音は出さない」等多くの項目が実践されており、話題にはあがらないが実践している項目であるといえよう。

これを男女別に見た結果を図４に示す。全ての項目で、女子の方が実践率が高かった。特に差が認められたのは「部屋などを飾りつける」「身の回りを片付け、汚れをためない」「部屋の模様替え」「日光の暖かさ明るさ、風を取り入れる」等であった。一方、差が小さいのは「冷房・暖房の調節をする」「大きな音は出さない」「使わない部屋などの電気は消す」等、室内環境調節的な項目であった。

女子の方が男子よりも生活そのものへの関心が高く、その中でも、特に、住まいの装飾に関することの実践率が高いという結果であった。

学年別では、５年生で室内環境調節的な項目でやや高く、６年生室内装飾と整理整頓についてやや高い傾向にあったものの、さほど大きな差は認められなかった。

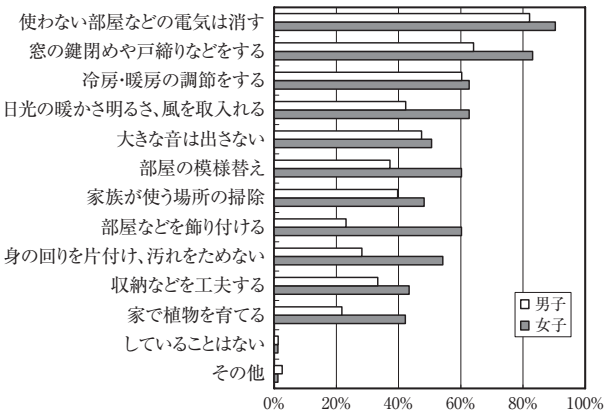

図４　住まい関連で家庭で実践していること（男女別）

２．家庭科及び各分野の学習への関心

⑴ 家庭科の学習への関心

家庭科の学習への関心を表５に示す。家庭科の学習が楽しいという回答は全体の84.3％で、６年生よりも５年生の方が、男子よりも女子の方が家庭科の学習を楽しんでいる傾向にあった。

	楽しい			楽しくない		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計
５年生	32	41	73(96.3)	3	0	3(3.9)
６年生	27	34	61(73.5)	15	6	21(26.3)
合計	59(76.3)	75(92.6)	134(84.3)	18(23.4)	6(7.4)	24(15.7)

＊人数（　）内は％

表２　家庭科の学習への関心（学年・男女別）

⑵ 各分野の学習への関心

次に、家庭科の学習で楽しい分野について図５に示す。「食物」が最も多く、「衣服」「お金の使い方」と続く。「住まい」は最も低かった。実習が含まれる分野が楽しいと感じる傾向にあった。これを男女別、学年別に見たが、特に大きな差は認められなかった。

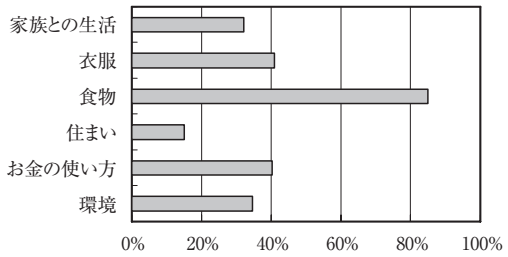

図５　家庭科の学習で楽しい分野

次に、家庭科の学習で楽しくないと感じる分野について尋ねたところ、「住まい」が最も多く、「環境」「家族と

の生活」と続く。当然のことであるが、楽しい分野の回答とは反対の結果であった。

これを学年別に見た結果を図６に示す。「住まい」は５年生は未学習、６年生は既習であるが、６年生で面白くないと感じる割合が倍近くとなっている。男女別では差が認められなかったことから、住まいについて学んでみて面白いと感じる内容でなかったものと推測される。

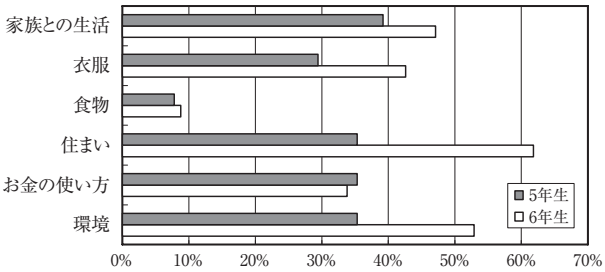

図６　家庭科の学習で楽しくない分野（学年別）

３．住居分野の学習の現状

⑴ 住居分野での学習への関心

住居分野での学習への関心について、楽しい内容、楽しくない内容の２種類についてみていく。５年生は住居分野が未学習のため、数値からは除いている。

楽しい内容・楽しくない内容について図７に示す。「整理整とんの工夫」が最も多く、「掃除の工夫」「汚れ調べ」と続く。

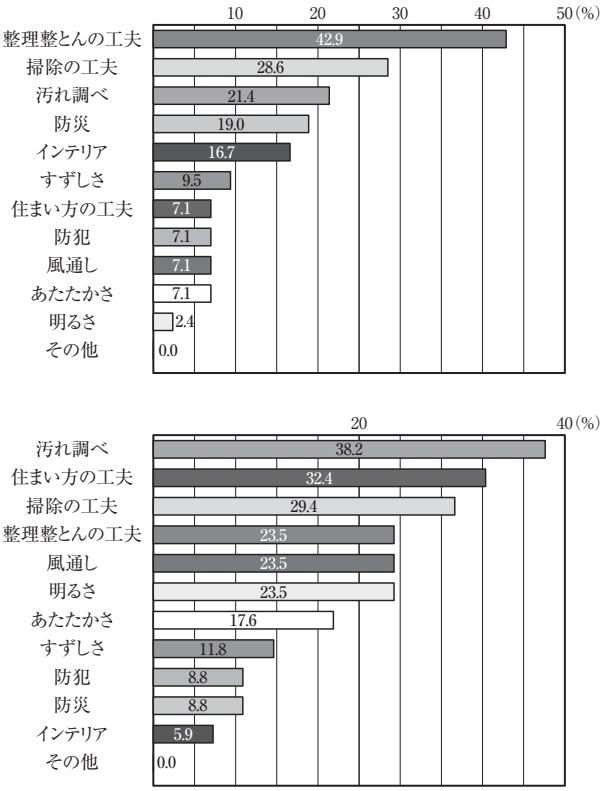

図７　住まい学習で楽しい内容・楽しくない内容

楽しくない内容は「汚れ調べ」「住まい方の工夫」「掃除の工夫」と続く。また、「整理整とんの工夫」「掃除の工夫」「汚れ調べ」の３項目については、学習への関心が高い内容、低い内容のどちらでも上位に位置していることから、題材そのものよりも、取り扱い方によるものと考えられる。

⑵ 日頃の生活に役立っていること

住居分野の学習内容にあるもので、日頃の生活に役立っていることについて図８に示す。「整理整とんの工夫」が最も多く、「掃除の工夫」「風通し」と続く。学習指導要領で決められている内容が上位にあがっており、学習内容が小学生の日頃の生活に役立っていることが伺える。

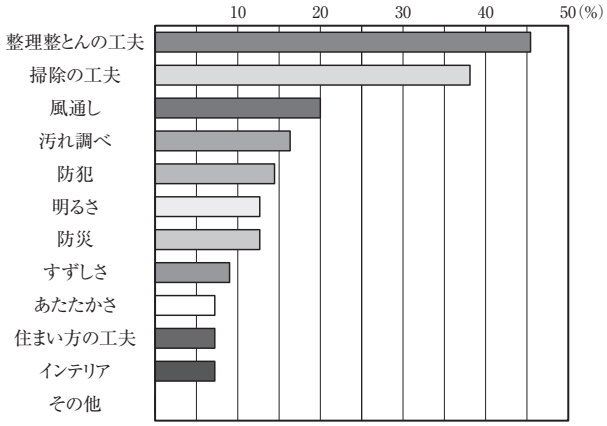

図８　学習内容で日頃の生活に役立っていること

⑶ 学習してみたい内容

学習指導要領に関わらず、家庭科の授業で学習してみたい住居の内容について尋ねた結果、「子ども部屋」が最も多く、「防災」「防犯」「室内での色の使い方」と続く。小学校学習指導要領で記載されている内容では「あたたかくすごす方法」が６番目に、「すずしくすごす方法」が８番目に、「掃除の工夫」が10番目に挙げられていることから、現行の学習指導要領の内容は小学生自身が学びたいと思っていることと多少異なっていることが伺える。

これを学年別に見た結果を図９に示す。ほとんどの項目で５年生の方が学びたいとする割合が高く、未学習のため学習への期待感が高いためではないかと考えられる。特に差が認められたのは、「整理整頓の工夫」「室内の色彩計画」「掃除の工夫」「家具の置き方」等であり、身の回りの整理整頓等の工夫とインテリア計画が高い傾向にあった。あまり差がなかったのは、「耐震」「防災」「涼しく過ごす方法」「住居の歴史」等であった。

男女別に見た結果を図10に示す。ほとんどの項目で男子より女子の方が関心が高く、男子の方が関心が高かったのは「耐震」と「住居の歴史」の２項目のみで、特に差が大きかったのは「室内での色の使い方」「掃除の工夫」「家具の置き方」であった。逆に差があまり認められなかったのは「部屋の明るさ」「騒音問題」「涼しく過ごす方法」「耐震」「防災」等、室内環境や防災関連の項目であった。女子の方が住居分野に関心が高く、特に室内のことについての興味があることが伺えた。また、学習指導要領で示されているものはあまり上位には含まれておらず、小学生の関心と違いがあることが伺えた。学習する

側としては子ども部屋など自分の身近なことに関心があるのに対し、指導する側としては、全体の場ではプライバシーに立ち入ることはできないという矛盾が生じ、この点が住居分野の指導の難しい点であるとも考えられる。

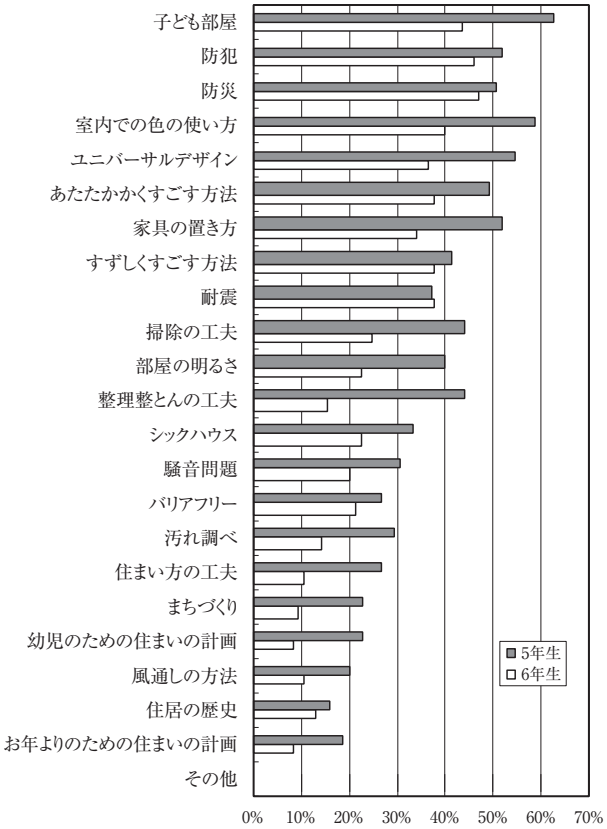

図９　家庭科の授業において学習してみたい住居の内容（学年比較）

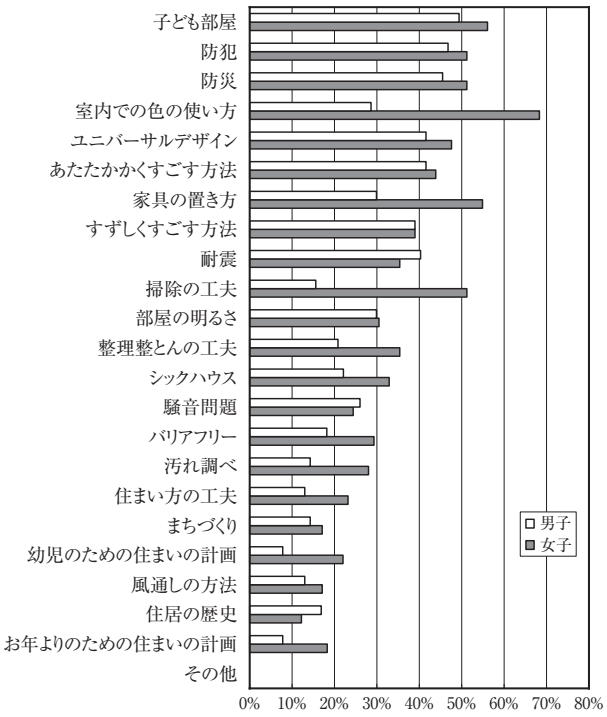

図10　家庭科の授業において学習してみたい住居の内容（男女別）

⑸ 授業で取り組みたい作業・活動

家庭科の住まいの授業で取り組んでみたい作業・活動について尋ねた結果、「部屋などを飾る小物を作る」が最も多く、「収納の時に使う小物を作る」「家や街などの模型を作る」と続く。何かを作る作業に関する項目が上位３項目を占めており、製作活動に関心があることが伺える。ビデオ・DVDを見る視聴活動が好まれている。調べる学習では、本などよりはインターネットを使用する活動の方が割合が高かった。

これを学年別に見た結果を図11に示す。全体的に５年生の方が多くの項目に興味を示す傾向にあった。６年生より５年生に多かったのは「部屋などを飾る小物をつくる」「理想の家・街を考えたり、絵をかく」「収納の時に使う小物をつくる」「住まいをテーマに絵本を作る」であった。５年生より６年生で多かったものは「ビデオ・DVDなどを見る」「家や街などの模型を作る」「住宅展示場・住宅設備の展示場見学」であり、同じ制作活動でもより難しいものや、現実の住宅に関する項目の割合が高く、より難しい内容の割合が高くなっている。

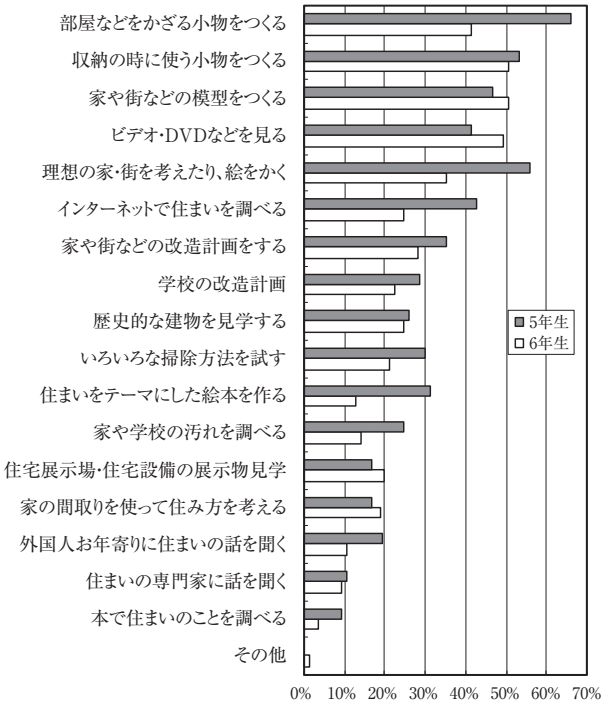

図11　授業でしてみたい作業・活動（学年別）

男女別に見た結果を図12に示す。女子より男子に多いのは、「ビデオ・DVDなどを見る」「歴史的な建物を見学する」「インターネットで住まいを調べる」であった。男子より女子の方が多かったのは「部屋などを飾る小物を作る」「収納の時に使う小物を作る」「住まいをテーマにした絵本を作る」であった。男子ではより学術的活動を好む傾向にあり、女子は制作活動を好む傾向にあり、小物を作る活動の割合は男子の倍にも及ぶことが特徴であり、男女で大きく違う傾向にあった。

これらのことから、住居分野の学習に興味を持たせるためには、家庭科内や他教科との関連付けを積極的に行

うことが有効ではないかと考えられる。例えば、家庭科の衣服と関連付けて収納の時に使用するウォールポケットなどの小物製作をしたり、図画工作で、家や街の模型を作ったり絵を描いたり、社会科や総合学習の時間で、街などの改造計画や歴史的な建物の見学などを行う、等である。ル・コルビジェの言葉にあるように、『住まいは生活の器』であるから、様々な科目と関連付けて指導することが可能であると考えられる。

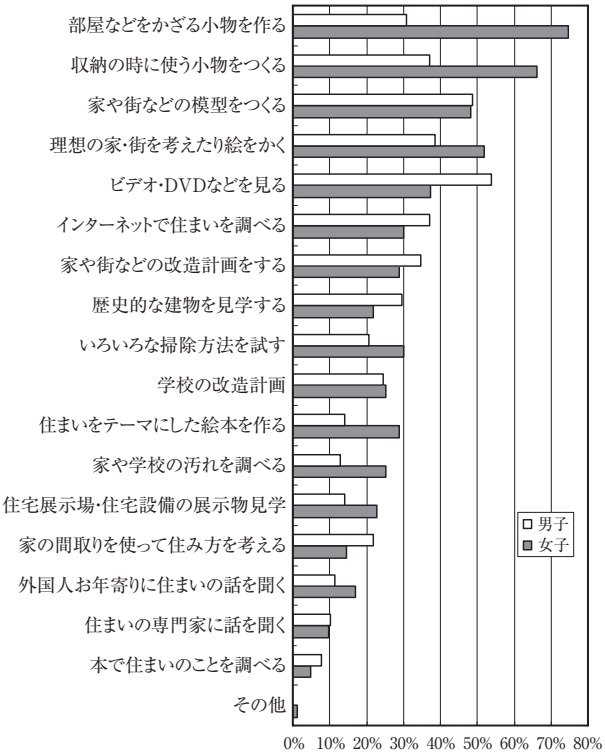

図12　授業でしてみたい作業・活動（男女別）

4．学校外での住教育について

⑴ 参加してみたい活動・イベント

学校外の活動などで参加してみたい住まいの内容について尋ねたところ、「家具やインテリア小物などの選び方」が最も多く、「安全な住まい（防犯、防災）づくり」「住まいの選び方」と続く。先述した家庭科の住居分野で学習してみたい内容では、子ども部屋、室内での色の使い方、家具の置き方などが多かったことから、家庭で実践していること、家庭での話題等と関連した結果が得られた。

学年別に見た結果を図13に示す。他の項目同様、この項目でも全体的に６年生より５年生で関心が高い傾向にあった。６年生より５年生で多かったのは「住まいによる環境への影響」「住まいの環境調節」等であった。５年生より６年生で多かったのは「バリアフリー・ユニバーサルデザイン」「住まいの問題・課題」であり、より学術的なことに興味を示す傾向が伺えた。

男女別に見た結果を図14に示す。全体的に男子より女子が多くの項目に関心を持つ傾向にあった。男子より女子で関心が高かったのは、「家具やインテリア小物などの選び方」「住まいによる環境への影響」「バリアフリー・ユニバーサルデザイン」であった。特に、「家具やインテリア小物などの選び方」は男子の約倍もの数値を示している。女子より男子で関心が高かったのは、「安全な住まい（防犯、防災）づくり」「住まいの歴史」であった。ここでも、女子にインテリア計画への関心が高いこと、男子でやや学術的色合いが強い項目への関心が高い傾向が認められた。

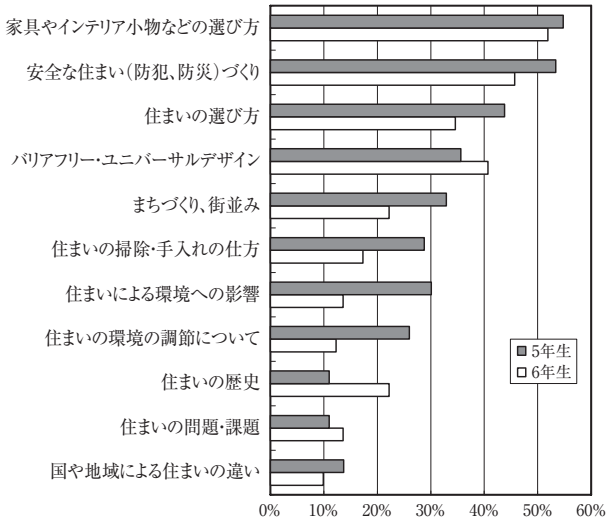

図13　参加してみたい学校外の活動・イベント内容（学年別）

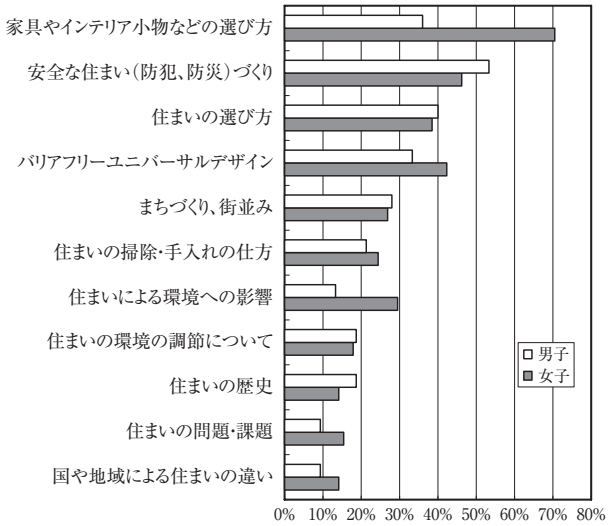

図14　参加してみたい学校外の活動・イベント内容（男女別）

⑵ 活動・イベントでしてみたい作業内容

学校外で行われる住まいのイベントでしてみたい作業・活動の内容について尋ねたところ、「収納の時に使う小物を作る」が最も多く、「部屋などを飾る小物などを作る」「家や街などの模型を作る」「理想の家・街を考えたり絵をかく」の４項目が飛びぬけて多かった。これらは先述した家庭科の住居分野でしてみたい作業・活動の上位項目と一致しており、製作活動に関心が強いことが伺えた。

これを学年別に見た結果を図15に示す。６年生より５年生の方が多く差が大きい項目は「収納の時に使う小物

を作る」「部屋などを飾る小物を作る」「住まいをテーマとした絵本を作る」「理想の家・街を考えたり絵をかく」「外国人やお年寄りから住まいの話を聞く」等である。５年生より６年生で多い項目は「家や街などの模型をつくる」「歴史的な建物を見学する」「住まいの専門家に話を聞く」であった。５年生は６年生と比較して、小物を作ったり、絵を描いたりする作業に関心が高く、６年生は５年生より学術的な項目の割合が高い傾向にあった。

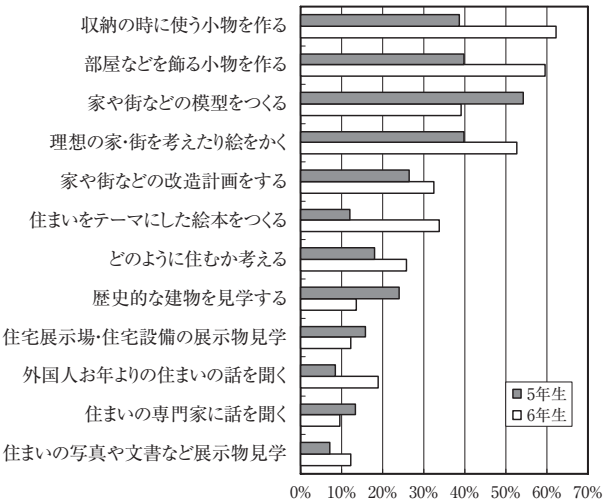

図15　学校外の活動・イベントでしてみたい作業・活動（学年別）

男女別に見た結果を図16に示す。女子より男子で多かった項目は「家や街などの模型をつくる」「歴史的な建物を見学する」「家や街等の改造計画をする」であった。男子より女子の方が多かったのは、「部屋などを飾る小物を作る」「収納の時に使う小物を作る」「住まいをテーマにした絵本を作る」「理想の家・街を考えたり絵をかく」であった。

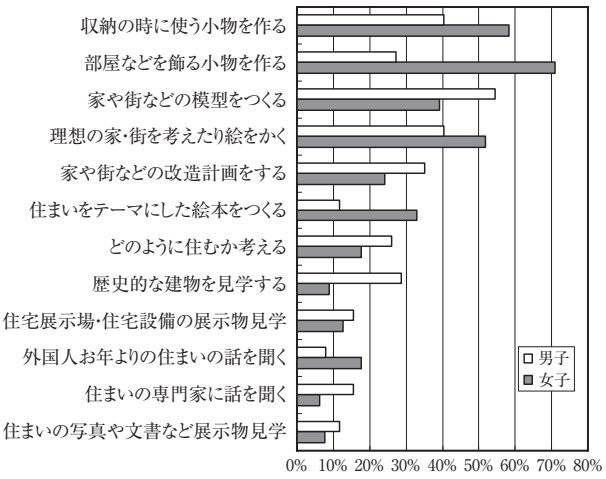

図16　学校外の活動・イベントでしてみたい作業・活動（男女比較）

全体的に見ても、男女別・学年別にみても、学校外でしてみたい活動・イベントでしてみたい内容と、家庭科の住居分野でしてみたい作業・活動の順位とは非常に似通った結果となっており、小学生にとって、住居分野の活動に対する興味・関心は、授業と授業外であまり区別がないものと考えられる。

女子は男子よりも部屋を飾るという行為に高い関心を持っていることが伺える。

５．要約

小学校家庭科における今後の住教育の在り方を考える資料とすることを目的とし、小学生の住意識と家庭科の住居分野に対する意識について調査を行なった。結果を要約すると以下のようになる。

1）小学生にとって、住まいとは、日常生活を営み、家族との関わりが大きい場所であり、住まいの外面的な機能性だけでなく、内面的な機能性や精神面から捉えていることが伺えた。

2）住まいに関する情報源は、テレビが最も多く、家庭科の授業、家族との会話と続く。家庭科の授業と家庭科以外の授業で回答数に大きな差があり、学校外ではほとんど行なわれていないことから、住教育は家庭科教育と家庭が大きく担っていることが推察される。

3）家族と話す住まいに関する話題は、整理整とんや片付け・掃除、戸締りや防犯等、小学生にとって身近なことがあがっていた。女子の方が話題の内容が多く、特に住まいの装飾に関連した項目の割合が高かった。男女差が認められなかったのは、「戸締りや防犯について」「住まいの環境の調節について」等、生活上必要な項目であった。

4）住まい関連で家庭で実践していることは、室内環境関連の項目で、家族との話題に多かった、整理整とんや片付け・掃除については、実践が少なかった。

5）家庭科の学習への関心は高いものの、住居分野への関心は低かった。

6）家庭科住居分野の学習内容への関心度については、関心が高い内容、低い内容に大きな差は見られず、題材そのものよりも、取り扱い方による影響と考えられる。

7）小学生にとって住居分野の学習内容で日頃の生活に役立っていることは、整理整とんの工夫、掃除の工夫、風通しと続く。整理整とんは、住居分野の中心的学習内容であり、小学生が家族と話していることや家でしていること、学習への関心のとの関連性も考えられ、身近な内容であることが伺える。

8）小学生が家庭科の住居分野で学習してみたい内容は子ども部屋が最も多く、防災、防犯と続く。小学校学習指導要領で示されているものはあまり上位には含まれておらず、小学生の関心と違いがあることが伺える。学習する側としては子ども部屋など自分の身近なことに関心があるのに対し、指導する側としては、プライバシーに立ち入る内容は扱いにくいという矛盾が生じており、この点が住居分野の指導の

難しい点であるとも考えられる。

9）小学生が家庭科の住居分野でしてみたい作業・活動は部屋などを飾る小物を作る、家や街などの模型を作る等、製作活動への関心が高かった。また、学校外での住居学習として参加してみたい活動・イベントでは、家具やインテリア小物の選び方、安全な住まいづくり、住まいの選び方等が多かった。学校外で行われる住まいのイベントでしてみたい作業・活動では製作活動が多くあがっていた。家庭科の住居分野で学習してみたい内容やと共通した部分も多かった。

10）全体的に、6年生よりは5年生の方が、男子よりは女子の方が住居分野に対して積極的な姿勢が伺えた。また、男女で興味・関心の方向性が異なっており、女子は室内を飾ることやインテリア計画、小物や絵本等の製作活動への関心が非常に高かった。一方、男子は同じ製作活動でもより専門的ともいえる模型等への関心が高く、歴史等のより学術的な内容への関心が高い傾向にあった。

家庭科における住居分野の学習は、子どもへの住教育の役割を大きく担っているにも関わらず、現状は、学習時間が少なく、教えられる内容も貧しいと言わざるをえない。生活の器である住居は、家庭科の他分野や他教科と関連させることができやすい分野である。同じ家庭科内での他分野との連携を図ることはもとより、他教科との連携をも図ることで住教育の時間を十分に確保し、取り扱い方を工夫することによって、小学生の興味・関心を高めることが望まれる。

また、家庭や学校外における住教育の機会を増やし、現実の住生活を見直し、問題意識を持ってより人間らしい生活に向上させるためにも、今後家庭科教育が担う住教育の役割は大きい。小学生に関心を持たせながら住教育を行なうことによって、少しでも今後の日本全体の住意識とそのレベルの向上に繋がっていくと考える。

引用文献

1）速水多佳子，関川千尋：「学校教育における住居領域の教育システムの有効性について」，日本家政学会誌第51巻第4号，p53～66，2000

2）鎌田浩子：「小学校家庭科教育の担当者の家庭科観と指導の実態」，日本家庭科教育学会誌第42巻第1号，p1～8，1999

3）矢野由起：「生活事象や生活行動に対する小学生の理解（第2報）―住生活および家庭生活分野を中心に―」，日本家庭科教育学会誌第45巻第1号，p52～62，2002

4）中間美砂子，伊藤圭子，：「小学校家庭科カリキュラムの検討―家庭科担当教員を対象とした調査を中心に―」，日本教科教育学会誌第19巻第2号，p61～66，1996

5）長沢由喜子，：「児童の生活経験が住居観形成に及ぼす影響」，日本家庭科教育学会誌第35巻第3号，p71～78，1992

6）中間美砂子ほか，：「小学校家庭科指導の研究」，建帛社，2003

7）武藤八恵子，：「家庭科教育再考」，家庭科教育社，1998

8）大学家庭科教育研究会編，：「現代家庭科研究序説」，明治図書出版，1972

9）伊藤冨美，三好百々恵，：「家庭科教育学」，ミネルヴァ書房，1980

10）文部科学省，：「小学校学習指導要領」，国立印刷局，p78～80，2003　12月（一部改正）

11）文部科学省，：「小学校学習指導要領解説　家庭編」，開隆堂，2004　5月（一部補訂）